

平成 27 年度研究成果中間報告書《平成 27 年度指定教育課程研究指定校事業》

都道府県・ 指定都市番号	13	都道府県・ 指定都市名	東京都	研究課題番号・校種名	3 (4) 中学校
				領域名	E S D
研究課題	<b>学習指導要領の実施を踏まえた、学校全体での教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究</b> (4) E S Dを学校全体で体系的に推進するために、各教科等の連携により、持続可能な社会づくりに関わる課題を見いだし、それらを解決するために必要な能力や態度を児童生徒に身に付けさせるための教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究				
ふりがな 学校名 (児童・生徒数)	おおたくりつおおもりだいろくちゅうがっこう 大田区立大森第六中学校 (382人)				
所在地 (電話番号)	東京都大田区南千束 1-33-1 (03-3726-7155)				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	<a href="http://academic3.plala.or.jp/om6j/">http://academic3.plala.or.jp/om6j/</a>				
<b>研究のキーワード</b> E S Dの思考力・コミュニケーション能力・態度 教科横断型クロスカリキュラム 農援隊 世界のトピックス つながり					
<b>研究成果のポイント</b> ① 全教員が教科を横断して3つの分科会「思考力」、「コミュニケーション」、「E S Dの態度」に所属した研究による授業改善。体験活動中心型から授業中心型への研究の転換 ② E S Dで身に付けさせたい力や態度について実施した、生徒意識調査 (平成 27 年 5 月) では、20 項目中 13 項目において、全校で 80%以上の生徒が肯定的に回答 ③ 活動の継続、活動の広がり ④ 生徒の活動、教師の活動、地域の活動がいずれも活性化					

## 1 研究主題等

### (1) 研究主題

E S Dの推進及び授業改善

### (2) 研究主題設定の理由

本校のE S Dは、平成 22 年度のユネスコスクールへの加盟前後に始まった。洗足池等が隣接する恵まれた条件を生かした環境教育が端緒となり、E S Dは地域連携を基盤として少しずつ広がりを見せる。

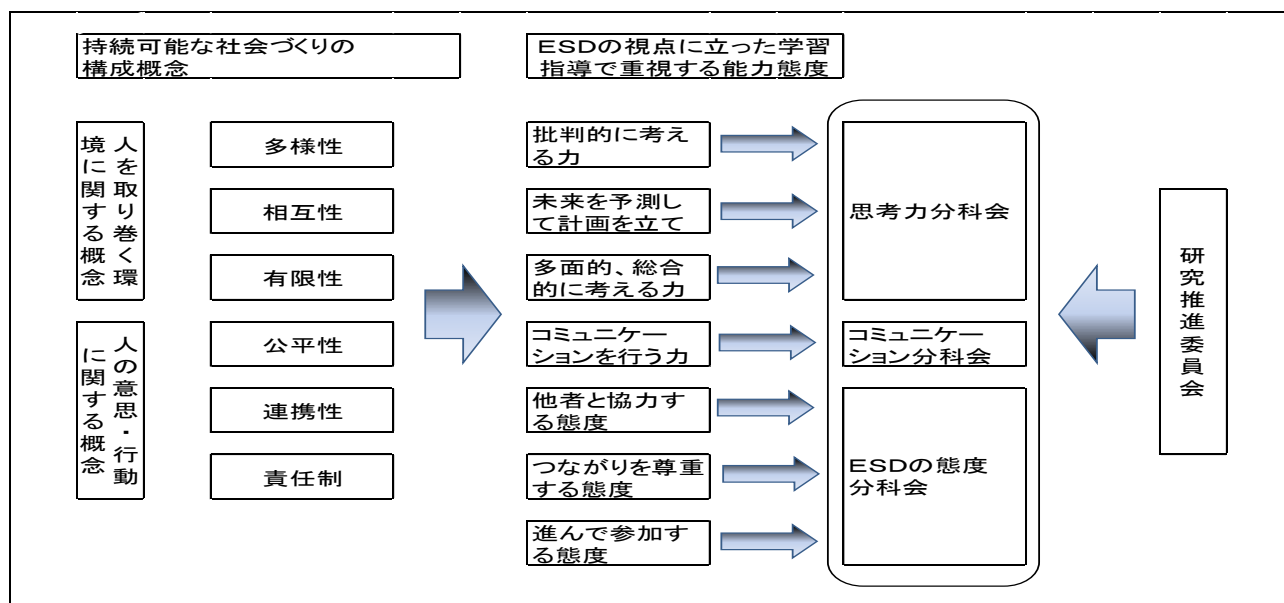
平成 22・23 年度の 2 年間は区の指定を受け「夢と希望を与える課題解決能力の育成～地域の学びから世界の学びへ～」をテーマとして研究を進めた。

こうした中、東北に発生した大震災により、国全体が危機状況の中で、持続可能な社会の構築の重要性が改めて深く認識されることになる。

研究は、防災教育、国際理解教育、生命教育へとつながっていく。この頃からE S Dで付けたい力 (国立教育政策研究所が 7 点例示) の育成が意識される。平成 24・25 年度は自主的に研究を継続し、平成 26・27 年度に再び、区の研究指定を受けるにあたって、これまでの「総合的な学習の時間」や「特別活動」での実践はもとより、授業を中心とした全教科での横断型の取り組みによりE S Dを一層推進することにより、E S Dで身に付けさせたい能力・態度の確実な育成が図られ、次世代を担う人材育成につながると考え本主題を設定した。

(3) 研究体制

① 校内研究組織は以下のとおりである。



② 地域等連携について、本校の研究は、多くの関係者の協力をいただいている。PTA、学校支援地域本部、地域、各企業、大学、NPO、区、都、文部科学省、国立教育政策研究所、国内外ユネスコスクール、海外関連機関等から専門的な指導から事務手続きや、様々な作業に至るまで全面的なご協力をいただいている。こうした連携も本校における研究組織となっている。

(4) 1年間の主な取組

平成27年度	<ul style="list-style-type: none"> <li>◆27.4 新体制組織づくり，研修会① 研究推進委員会，各分科会を構成，各教職員の役割分担と，意識の確認</li> <li>◆27.5 生徒検証アンケート実施 ESDで身に付けさせたい力や態度について生活における意識，学習に臨む意識を調査</li> <li>◆27.5 研究授業・研修会② 講師 成田喜一郎氏（東京学芸大学）</li> <li>◆27.6 研究授業・研修会③ 講師 成田喜一郎氏（東京学芸大学）</li> <li>◆27.7 研究授業・研修会④ 講師 田村 学氏（視学官）</li> <li>◆27.9 研究授業・研修会⑤ 講師 田村 学氏（視学官）</li> <li>◆27.9 研究協議・研修会⑥ 講師 成田喜一郎氏（東京学芸大学）</li> <li>◆27.10.16 研究発表会（大田区教育研究推進校最終，国研教育課程研究指定中間） 「ESDの推進及び授業改善」を主題とした研究発表会を実施，成果と今後の課題を確認</li> <li>◆27.11 研究発表の反省及び今後の方針</li> <li>◆27.1 研修会⑦ 新体制への教員意識調査，次年度のESD構想図について</li> <li>◆28.2 研修会⑧ 次年度の計画，全国学力・学習状況調査の結果を検証</li> <li>◆28.3 研修会⑨ 次年度の計画，次年度の組織計画</li> </ul> <p>※ 研究授業は分科会ごとの観点から展開し，全員で課題を確認（各教員各年1回） ※ 特別活動，ボランティア活動，部活動等における活動は常時実施</p>
--------	--

2 研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究内容

ア 授業改善への取り組み／ESDと教科とのつながり

今回の研究では授業改善を最重要課題としている。ESDで身に付けさせたい力や態度について、年度当初に教員アンケートをとり、協議を行い、ESDで身に付けたい力（国立教育政策研究所が7点例示）を集約して3つに分類し、3つの分科会が分類された課題を担当した。分科会は「思考力分科会」、「コミュニケーション分科会」、「ESDの態度」の3つ。各教員が各1回の提案・実験授業を行い、分科会単位または全体会で分析や、改善のための提案等を行うとともに講師等による指導を受け授業改善を行った。

## イ 授業以外の取り組み／E S Dとさまざまなつながり

これまでの取り組みに加え、新たな実践も行った。「人とのつながり」、「命とのつながり」、「環境とのつながり」、「地域とのつながり」、「世界とのつながり」、「国内とのつながり」等、「つながり」をキーワードに進めた。

### (2) 具体的な研究活動

#### ア 授業改善への取り組み／E S Dと教科とのつながり

▽ 「思考力分科会」では、「批判的に考える力」を「解決方法が一つではないことを意識し、協働してよりよい解決策を見出していく力」、「未来像を予想して計画を立てる力」を「より良い未来像を共有し、その実現のために必要なスキルやステップを考え実行していく力」、「多面的、総合的に考える力」を「情報共有をしながら、互いの考えの共通点や、相違点を理解し、共感・統合により課題を解決する力」と規定した。授業では、伸ばす力を明確にし、アクティブ・ラーニングを積極的に取り入れ、最適の授業形態を研究し、常時E S Dで重視する態度（他者との協働、つながりの尊重、主体的な参加）を意識し、生徒が主体的に学ぶ授業づくりを行った。

例えば「P波とS波から震源と地震の発生時刻を求める」（理科）で、教師自作の装置を用いた実験、動画、経験者談等をもとに協議を行い、電子黒板やミニホワイトボードで情報をとりまとめ、直感的な予想が根拠を適切に提示できる推論へと変化する様子を体験させるなどした。

▽ 「コミュニケーション分科会」では、自分の考え等を持つ「発想力」、根拠をふまえて適切に伝える「論理力」、相手の主張を聞き取る「聞く力」、相手の意見から自分の意見を構築する「批判的思考力」、前述4つの力を効果的に発揮できる「コミュニケーションを行う力」を研究した。

例えば「江戸からのメッセージ-今に生かしたい江戸の知恵」（国語）では、班毎にまとめた根拠をもとに効果的なディベートにより互いの理解が深まる授業等を行った。

▽ 「態度分科会」では、E S Dにおいては「他者と協力する態度」、「つながりを尊重する態度」、「進んで参加する態度」を重視し、そのような資質を育成することが問題解決能力につながると考えた。また求める生徒像を、異文化を拒まない、命を大切にす、積極的に関わるとした。さらに生徒像に迫るためには、共通テーマの設定が有効と考え、ユネスコの理念から、そして戦後70年から「平和」を共通テーマとして、学習を進めた。

例えば「エネルギー変換技術の評価と活用」（技術）では、バイオ燃料の特長と問題点を確認しながら、バイオ燃料と食糧生産が両立するようなくみについて考える等の授業を行った。

#### イ 授業以外の取り組み／E S Dとさまざまなつながり

▽ 「人とのつながり」では、ボランティア活動として、まず本校のボランティア団体「農援隊」による、平成24年から継続中（毎月1回実施）の「大岡山駅前花壇メンテナンス」がある。大岡山北口商店街振興組合、NPO法人、東工大ボランティア、区のまちなみ維持課、地域住民等と協働している。「エコキャップ運動」では、地域小学校・商店街・住民の協力を得て、活動8年で739,389個（ワクチン892人分）を回収した。「落ち葉掃きボランティア」は10月下旬から12月中旬まで毎朝校庭等の落ち葉掃きを行い、地域小学生、住民を招待して焼き芋大会を行う。

「学校生活改善のための活動」として、小中連携で「あいさつ月間」を決め、ポスターを作成し小中4校が同時に行う「あいさつ運動」、特別清掃と、修繕等をPTAや卒業生の協力も得て行う「校内キレイキレイ活動」、大岡山北口商店街の「東北エイド」等に参加しての、東日本大震災の被災地への募金活動がある。募金をしていただいた方には、生徒たち手作りのスイーツ「勝チョコクッキー」をお礼として差し上げる。

▽ 「命とのつながり」では、校庭敷地内から防空壕が発見され、保存工事が完了した（平成26年）11月12日を平和の日と定め、平成26年には、広島市長から「被爆アオギリ2世」の寄贈を受け、校庭に植樹した。平成27年には、生徒会「平和学習委員会」の発案により、全校生徒で「平和の詩」を作詞、本校音楽科が作曲をして「平和の歌」が完成した。また経営理念として「人の命を守る」等を掲げるF社の協力を得て「命を守る授業」等を実施した。

▽ 「環境とのつながり」では、平成22年から「公益社団法人洗足風致協会」、「横浜ホテルの会」、「NPO印旛沼いかだの会」等の協力を得て、洗足池では昭和初期に姿を消したホテルを水質調査・改善、幼虫飼育・放流等により自生、復活を目指す「ホテル復活プロジェクト」、エネルギー対策のための「グリーンカーテン設置」、「腐葉土づくり」等を行っている。

▽ 「地域とのつながり」では、10自治会、2消防団、消防署、区防災課等と協力して「避難所

開設」、「傷病者搬送」、「炊き出し」、「災害対策電話設置」、「消火訓練」等を行う「学校防災訓練」を平成 22 年度以降毎年 5 月に実施し地域を守る意識を高めている。また地域住民等と地域の危険箇所や防災資源等を点検する「まちなか点検」や地域 3 小学校と施設分離型でテーマを「効果的な交流と接続を図る」とし、各教科で研究授業、部活動、児童会、生徒会等の交流を行う「小中一貫教育」等を実施している。また小中学生対象で洗足池自然講習会も毎年実施している。

▽ 「世界とのつながり」では、中国招聘プログラム、韓国招聘プログラム、日米交流プログラム等への教員参加、国際フードプロジェクトではインドや国内の学校とフェイスブックやスカイプでの交流、子供服を難民に送る活動へ地域と協力して参加、毎月 2 回担当教師（全教師持回り）により新聞記事を紹介し、全生徒が意見や感想を書く「世界のトピックス」等を行っている。

▽ 「国内とのつながり」では、南三陸町への継続支援、視察訪問、南三陸町立志津川中学校職員による、本校での「ユネスコ講演会」、愛知県豊田私立藤岡南中学校との生徒交流会等がある。

### 3 研究の成果と課題

#### (1) 成果

[授業改善において]

- 学習課題を明確にした課題解決型の授業により、生徒の意識が、知識獲得から課題解決へと変しつつある。
- 協働学習を重視した取り組みにより、生徒同士の学び合いが増え、「批判的に考える力」や「多面的、総合的に考える力」が培われてきている。
- 他者の意見を参考に、共感や批判により自らの考えを深めることができるようになった。
- 一つの教科の取り組みの成果が他の教科の成果につながった。また個人のよい発表がクラス全体の表現力の向上につながった。
- 全てのグループで話し合い活動ができるようになった。司会、リーダーを決めなくても、人数に関わらずスムーズに話し合いをすることができるようになった。コミュニケーションをとることで相手を尊重することができ、より良い人間関係を作ることができるようになった。
- 自らの考えを深め、それを表現できることで自己肯定感が高まり、達成感を得られた。
- 「持続可能な平和な世界」について、総合的な学習の時間、国語、社会、理科、保健体育等、各教科で多面的な切り口があることが分かった。
- ユネスコスクールであることを生かして多くの学校や世界の人との異文化交流を通して生徒の積極的に関わる態度やつながりを尊重する態度を育てることができた。

[教育課程の編成について]

- 教科を越えた取り組みが「クロスカリキュラムの作成」や教育課程の充実につながった。
- 課外活動と各教科との関連付けにより、体験活動と学習活動がより結びつきつつある。

[その他]

- 地域連携において、学校の願い、地域の願いがつながり、新たな工夫が生まれつつある。

#### (2) 課題

- E S D で身に付けさせたい力や態度について実施した、生徒意識調査（平成 27 年 5 月）では、「自分が意見を言うことで、問題を解決することができる」（最低値 55.9%）、「他の人と考えが違ふとき、前向きな別の案を考え説明することができる」（同 64.9%）となっており改善したい。
- E S D カレンダーで、各教科の単元ごとに、どの思考力をねらいとするかを共有する。3 つの思考力の学年毎の到達点、3 年後や将来の到達点を明確にする。
- 知識獲得や、法則理解のための課題に対しても、生徒の主体的な取り組みを啓発する工夫
- 自学自習においてもアクティブ・ラーニングに取り組むことのできる生徒の育成

#### (3) 2 年目へ向けての取組

- ・生徒、教師、授業協力者等が解を求めて協働し、白熱する授業の展開
- ・E S D によりあらゆる方向性への対応力を高める授業の実践およびプログラム構築
- ・今後の教育課程や学習指導要領の方向性の提案につながるような E S D カレンダーの作成
- ・成果を適切に検証する評価方法、自己トレーニングを啓発するポートフォリオ活用方法の考案
- ・「地域は屋根のない学校」に向けて、全ての関係者が E S D の意義を意識して、活動する
- ・調査紙法の工夫により E S D の教育効果を経年変化で測定し、効果的に情報公開する。